

カトリック 仙台教区報

2008年1月6日 No.179

発行

カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12

Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

URL ; <http://sendai.catholic.jp/>

2008年 年頭書簡

光の子として歩もう「」

仙台司教 マルチノ 平賀 徹夫

仙台教区の司祭、信徒、修道者の皆様、明けましておめでと
うございます。

人類の救いのために神の御独り子が人となってお生まれくださってから2008年目を迎えました。主のご降誕を喜び合う大きなお祝いの中に迎えた新年、今年の日一日もまた、主と結ばれて主とともに歩む日々とする決心を固めながら、父である神にこの一年をおささげしたいと思えます。本年もどうぞよろしくお願
いいたします。

信仰の誇り

昨年の年頭書簡は「光の子として歩もう」ということでした。「信仰の恵みと人信の秘跡によってわたしたちは皆、主に結ばれて光の子となりました。わたしたちは今すでに光の子です」という信仰の誇りを確認し、そこから力を得て共に歩んでいきましようと呼びかけたのでした。実際、この誇りこそが、信者であることの喜びと自信の一番の根拠となるのではないかとわたくしは思います。教区の皆様はこれを受け止

め、各県・地区での集まりや、小教区やグループでの多くの集まりのたびに、「光の子として歩



教皇様に仙台教区の状況を報告する平賀司教

の信仰の誇りをさらに強く確かなものとしていけたら良いと思
います。

信仰の伝承

今年2008年に予定されている多くの行事の中で、日本の教会にとつて最も大きなものは11月24日に長崎で行われる「ペトロ岐部と187殉教者」の列福式でしょう。実際に参列するかどうかは別に、仙台教区でも列福式に向かう準備に取り組みたいと思います。「殉教」はどのような意味をもって現代のわたしたちに迫って来るのでしょうか。「なんとありがたいことでしょうか。捨てがたい宗教です。このような事態になりました」とは、

の積み重ねが欠かせないことだろうと思えます。現代の世相では見向きもされない言葉や考えかもしれません。しかし、わたしたち光の子らの間でなら、親(大人)同士、あるいは子どもと一緒に、語り合ってみる必要があるのではないのでしょうか。わたしたちは何を一番に大事にしているのでしょうか。そしてそれは本当にそうする価値のあるものなのでしょうか。

キリシタンとして処刑された小笠原みやという女性の遺書にある言葉です(『ペトロ岐部と187殉教者』 32ページ)。命をかけてでも守る価値のあるものを持って、それを本当に大切にしていたことの証しです。「光の子である」というわたしたちの誇りを、真に命をかけるほどに価値あるものとできたらよいと思いますが、そのためには、きつと日常よく直面する小さな試練での犠牲や忍耐

かかわりが大切であることは論を待ちませんから家庭での祈りや語り合いの時を作るように努めて頂きたいのですが、これは、それぞれの家庭のこととしてまかせればすむという事柄ではないと思えます。まず教会の集まりの中で、司祭・修道者も加わりながら、親同士あるいはできれば親も子も一緒に祈り、また語り合うことを体験することで、より容易に家庭へと延長されていくとも考えられるのではないのでしょうか。またこれは、日曜学校での活動についてもあてはまることで、親たちも(賢明さは必要でしょうが)積極的に関わっていつてよいのではないかと思
います。

また、光の子として共に日本の教会を構成している海外から来られた方々やその子供たちとの交わりを深めることにも意を注ぎたい

と思います。仙台教区では、昨年夏、略称「教区ヘルプデスク」が立ち上げられました。問題に直面した方々のお役に立ちたいためですが、まだ緒についたばかりです。今後の充実のために多くの皆様のご協力をお願いしたいと思います。その協力とはまず、近所に住む方々を知り、交わりの輪を作ることから始まるでしょう。そしてその輪が教区中に広がらなければいけません。こうしてヘルプデスクへの関心を高めることにつなげていただけたらありがたいと思います。

青少年の皆さんに

今年7月にオーストラリアのシドニーで世界青年大会(WYD)が開かれます。今まで、カナダのトロントやドイツのケルンでの大会に参加された青年たちは、世界中の若者達と共に本当に良い信仰の体験をしてきました。そして日本に帰ってからお互いに連絡を取り合いながら、青年ネットワークを立ち上げたりして交わりを強めて活動をしていま



WYD 08 のロゴマーク

す。わたくしはこのような青年達の動きを大いに支援したいと思えますし、教区の皆様にも賛同して頂きたいと思っています。今年のシドニー大会は、多くの学生にとっては試験期と重なっていて都合の良い時期でないのが残念ですが、しかしその後、8月14日から16日まで、日本での青年大会が山梨県の山中湖で開催されますのでそれへの参加をお勧めしたいと思います。

司祭召命のための

祈りのお願

教区の皆様に、今年も是非ともお願いしたいことがあります。昨年お書きしましたが、司祭召命を求めている祈りです。わたし自身も光の子として招いていただきたいことを誇りとし喜びとしてい

る。この表れとして、「あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる(ヨハネ16・23)」との主の言葉を頼りに、なお一層の祈りを捧げてくださるようお願いいたします。

2008年1月1日

若い世代に信仰を伝える「家庭の信仰教育のすすめ」
司教神学顧問 佐々木 博

信仰の価値観を伝える

家庭における信仰教育の基本は信者としての生き方を伝えることです。まさに、親の後ろ姿によって生き方を示すことにほかなりません。しかも、この後ろ姿は、親の信仰の価値観に基づいて現れます。つまり、世間の価値観ではなく、信仰に基づいた価値観をしっかりと持っているのが問われるのです。それは、信仰を生活の中

にしっかりと根付かせているかどうかであり、具体的な態度で示すことです。パウロは信仰者の生き方の基本を次のように教えてくれます。「自分のからだを神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそあなたがたのなすべき礼拝です。あなたがたは、この世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たに自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい(ロマ12・1-2)。まさに、神の御心を中心にした生き方を実践することです。

実践することです。信仰の価値観を伝える。家庭における信仰教育の基本は信者としての生き方を伝えることです。まさに、親の後ろ姿によって生き方を示すことにほかなりません。しかも、この後ろ姿は、親の信仰の価値観に基づいて現れます。つまり、世間の価値観ではなく、信仰に基づいた価値観をしっかりと持っているのが問われるのです。それは、信仰を生活の中

みことはを伝える

聖書のみことはを、子どもたちの信仰がみことはによって育て

塩と光

取り組むべき課題を確認したならば、それにどのような取り組みが必要かという方法論が必要で、また、方針を定めても、それ

らるために、伝えるので、みことはは、信仰教育にとつてなくてはならない霊的な糧です。幼い日から十分に聖書に親しむことができると、親子が共にみことはを分かち合うことを、日々の家庭生活の中しっかりと定着させることです。パウロは最後の勧めとして、弟子のテモテに宛てて書きました。「自分が幼い日から聖書に親しんで来たことをも知っているからです。この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます。聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするつえに有益です。こうして、神に仕える人は、どのような善い業をも行うことができるように、十分に整えられるのです(テモテ3・15-16)。特に若者たちが信者としてふさわしい生き方を身に着けつるために、みことはを十分に学ぶ必要があります。つまり、日々の生活にみことはを根付かせることが肝心です。「良い土地に落ちたのは、立派な善い心でみことはを聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである(ルカ8・15)。

また、典礼の源泉であるみことはから豊かな力をもちつたためにも、口頭から聖書に親しんでいることが肝心です。取り組むべき課題を確認したならば、それにどのような取り組みが必要かという方法論が必要で、また、方針を定めても、それを実施するための具体的な道筋を明確にすべきです。福音宣教活動を推進するという方針を立てるならば、この方針を実現させるために、まず福音宣教とは何かという基本的理解を深め、その実践について学ぶなどの宣教者を養成するプログラムの実施が必要で、日本カトリック信徒宣教者会も、会員が共同生活を送りながら、7ヶ月の研修を受け、さらに派遣された現地で語学研修を続けるのです。各小教区での教会活動のためにも、研修が必要で、この研修の基本は「みことは教育」です。つまり、聖書を丁寧に学び、みことはによって信仰を深め、豊かにするという「信仰の生涯教育」です。それぞれの教会が、福音を身近なところから宣べ伝えることのできる宣教共同体に成長するのは、そのための養成プログラムの実施が急務です。「みことはを宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。忍耐強く、十分に教えるのです(テモテ4・2)。(博)

「第37回福島県カトリックの集い」

光の子として歩むために

共同体として支えあうために、何をしていますか

「第37回福島県カトリックの集い」は、9月17日、表題のテーマを掲げ、平賀司教をはじめ司祭・シスター・信徒ら233名が参加し、新築なった「いわき教会」で開催した。午前は、平賀司教が昨年の年頭書簡で示した「光の子として歩もう」をもとに、司教の講話を聴き、午後は、司教主司式により、説教を板垣勲司祭、司祭8人の共同司式で歌唱ミサがささげられ、これに浜通りらしい2つのイベントを加えた。そして、最後に、皆さんで「美しきふくしま」を歌い、信仰を持って生きることの喜びをかみしめながらこの大会を終えた。

平賀司教講話(要旨)

今の教会に

元気はあるのか
教会が元気であるためには、小教区に所属している一人ひとりが元気でなければならぬ。信仰の世界で元気に燃えるというのは、人の話を聞いたり、他から刺激を受けただけで元気になるのではない。これに同意するなり、反発するなりして、自分の暮らしかや信仰に照らして、どうなのかと下りていかないと意味はない。

教皇ベネディクト16世は、回勅『神は愛』の中で「重要なのは、無償で与えられる愛を自分の中で経験すること。そしてこの愛は本性的に人に分け与えないではいられないもの。」「と述べている。つまり、ふさわしくないわれわれ

にも、無償で神様から与えられた愛を一人ひとりが自分の中で経験すること、これがないと元気で生き生きした信仰にはならない。

一昨年の「福島県の集い」で信仰体験の発表があり、一人ひとりが、どこで、どんな時に、どのように神の力と愛を受け止めたか、を語った。これは洗礼を受けた者が神と出会い、神に生かされていることの証である。信仰は一人の中に閉じ込めておくものではなく、他人にも分け与えるもので、この表現が「分かち合い」である。「分かち合い」は心をひらいて自分で話すときは見栄を張ら



ないこと、綺麗なことを言わないこと。こうして自分をひらいていけば、そこに集った人も心をひらいて話すようになり、話すことの苦手意識もなくなる。

信仰はどれだけ大切なのか
信仰は、大事だと頭で分かっているても自分に燃えるものがないと心までには入っていかない。マタイ福音書13章「天の国のたとえ」にあるように、私たちは信仰を手に入れるために、これまで大事にしていた宝物を捨ててもいい、信仰はこれだけ価値のあるものだと考えているだろうか。一番大事なものだと考えているなら子供にも伝えたいと思うはず。

私たちはすでに「光の子として歩もう」というと、ではどうすればいいのかと受け止めがちだが、そうではない。私たちはすでに光の子である。自分を顧みたととき、あの時あんな悪いことをした、失敗もした、本当に自分はよくない、と思うことがあっても、これらを全部ひっくり返して、私たちはすでに光の子なのである。これが「信仰の恵み」である。私たちの救いはイエス様

がご自分の命をささだして十字架にかかり、死んで私たちの罪の償いとされ、そのお陰で私たちは神の救いをいただいた。これがキリスト信仰の一番である。

では、主に喜ばれるためにどうすればいいのか。これを私は昨年の年頭書簡で、「頭と心と体を使って聖書に親しみ、心から祈り、典礼を大切に、これに行動的に参加すること」と述べただからではなく、来ないではいられない、集まらないではいられないから来る。そして、ここに集まれない人達に、この交わりの喜びを伝える。こうして、互いが支え合っていけば、教会は活き活きと元気になる。

講話が終わって司会者の宣言
私たちは、もっと元気になるために無償の愛を自分の中で経験し、光の子なので体を使って心を合わせ、アクションを起こしましょう。

浜通りらしく、イベント2題
(1)「クラシック・オルガン」の初めての本格演奏、新聖堂の建設に併せて設置したオルガンの演奏を一度プロの演奏で聴きたい。この思いが今回実現した。

パイプオルガン奏者・加藤麻衣子さん(東京芸大院生)の演奏、バッハのオルガン曲「トッカータとフーガ」ほか5曲は実に素晴らしかった。あのパイプオルガンの

荘厳な響きを聖堂いっぱい、美しい旋律で奏でてくれた。まさにこのオルガンは、教会音楽の王様であるといふことを実証した。

(2)「浜の海の匂い」子供たちには、浜らしく「帆立の目殻を使った絵皿作り」をしようことにした。貝は現教皇様の紋章に使われ、世界を旅する教会の象徴にもなっている。これをペンダントにして、参加者全員の前に向けてもらえば共同体の一致も図れ、またこれを持ち帰れば浜通り開催の記念にもなると考えた。250個もの殻をどう集めるの?と心配したが、終わって担当者が一言「小名浜の帆立貝は美味かったよ」で皆が安堵した。

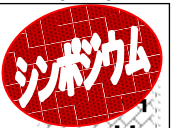
弁当の仕込みは、浜のご婦人たちが、有名割烹店に通い試食を重ね、価値切って完成したのが、あの「味一番」浜の弁当。これも実に美味しかった。

・遠路、会津・中通り地区より多数参加いただき心よりお礼申し上げます。

・ミサ献金金9万1564円は中越沖地震に対する義援金として新潟教区に送らせていただきました。皆様の協力ありがとうございました。

・また、大会運営のため、事務局を中心にご協力いただいた多くの皆さんに、心より感謝します。

(いわき教会・竹内 清)



「ハンセン病とカトリック」 隔離から解放へ

2007年11月3日

（土）カトリック元寺小路教会
大聖堂で「ハンセン病とカトリック」と題したシンポジウムが開催された。これは、日本カトリック部落問題委員会が主催するもので、この委員会の前担当司教である谷大司教（さいたま教区）が、仙台での開催を希望されたことを受けてカトリック仙台教区人権を考える委員会が共催した。図らずも、その後同委員会の担当司教が平賀司教に引き継がれた。

冒頭、平賀司教は100余名の参加者を前に、「文化とは、人間が人間を大切にしようということが基盤になっていなければならない。人権問題として大切なことをカトリック教会はあまり目を向けなかったということを反省しなければならぬ。私自身も、今回カトリック部落問題委員会を担当することになって、ハンセン病の問題に対して知らなかったことがたくさんあることに気づかされた。このシンポジウムで、私たちが知らなかったことを知り、何をすべきかを考え、な

すべきことを一緒に果たして行けたらいいと思う」と挨拶した。
3人のシンポジストの中、先陣を切って平野昭氏（東海地区退所者の会「さくらの会」代表）は、「今でも90%の方は自分が元ハンセン病だったことを話



せず、家族のもとに帰られないでいる。戦時中は国辱とされ、各県が『無らい県運動』と称して隔離政策を実施し、『お召し列車』と称した貨物列車の最後尾に古い客車を連結し、『伝染病患者護送中』と客車の横に張り紙をして、隔離施設に感染者を運んだ。

すべきことを一緒に果たして行けたらいいと思う」と挨拶した。

隔離政策が終了した今、社会復帰をしようにも、財産もなく、住宅・社会保険証・介護保険証がない状態では社会復帰は不可能である」と、元患者の立場から話された。

次に九州大学教授 内田博文氏（元ハンセン病検証会議副座長）は、「日本ではハンセン病患者の存在は国の恥、国の体面を保つために隔離政策を行なった。プロミンという特效薬が出来たことにより完治する病気だが、この薬の使用を療養所内に限ると定めることで実質的に隔離を続けていた。これは、外来治療に切り替えた世界の流れに逆行する政策である。また、戦前でも断種・墮胎は違法であったのに、戦後新憲法のもとでさえ『優生保護法』を楯に患者の断種・墮胎を行っていた。

1960年代に隔離をやめれば、入所者はまだ40歳代で社会復帰も可能だったが、30年も遅れたため、70歳代になった入所者に社会復帰はすでに無理である。こうして国の政策は彼らから社会で普通に生活する権利も方策も全て奪った。こうして人が作った過ちを宗教者たちは『運命として受け

入れなさい」と説得し、かわいいそんな人とすることで止まっている」と、国の過ちと社会の無策の実態について話された。さらに、3番目にノートルダム清心女子大学教授の田代菊雄氏は、カトリック教会が、ハンセン病問題にどのように対処したかについて話された。

「カトリック教会は、人権問題や、社会問題に対する感覚が薄い。全国に13の国立ハンセン病療養所があるが、そのうち12ヶ所にカトリック教会がある。そのほとんどが国立療養所の敷地内にある。ハンセン病患者に手を差し伸べたのは、ほとんどが外国人宣教師であった」と教会の歴史的な取り組みについて話された後、マザー・テレサの言葉を引用して「愛の反対は憎しみではなく、無関心である。私たちは、この問題に関心をもち理解することから始めなければならない」と話を結んだ。

休憩を挟んで、質疑応答が行なわれた。
参加者の中から、松丘保養園（青森県）入所者の滝田十和男（たきた とわお・カトリック松ヶ丘教会信徒会長）さん写真下から、当時園内で死亡した

人は、東北大学の教授たちの解剖用に献体され、仙台から教授たちが来て解剖したという事実と、当時の所長による独裁的な采配が行なわれていたことを話されるなど、経験者にしかわからない事実を聞いて、参加者は改めて差別の実態を知った。

「私たちは、何をしたらいいのでしょうか」との質問に対してパネルからは、「うっかりしている、自分が差別する側にいることもある。人の痛みがわかることが大切」「理解することが大切だが、全てわかったと思ったときに過ちが始まる。常に理解し続けることが大切」とありあえず、療養所を訪ねて、入所者の方の話を聞いてあげてください」などのアドバイスがあった。

参加者の一人は、「お話を聞いてキリキリと胸が痛みました。知らなかったこと、知るところしなかったことにショックを受けました。このことを風化させないで若い人にも伝え続けていかなければならないと思います」と感想を語った。
（岩井 誠）



「ペト口岐部と187殉教者」列福式参加巡礼の旅

Aコース(上五島・平戸・生月4泊5日コース) 見積価格 ¥146,700

- 11/23 仙台空港→福岡空港 = 長崎市内 長崎市内(泊)
- 24 長崎市内巡礼 = (浦上教会・国宝大浦天主堂・日本二十六聖人殉教地など) = ペト口岐部と187殉教者の列福式参加 = ホテル(泊)
- 25 ホテル = 長崎港 ~ (ジェットfoil) ~ 奈良尾港 = 福見教会 = 桐教会 = 土井の浦教会 = 若松 = 中の浦教会 = 青砂ヶ浦教会(ミサ) = 新上五島(泊)
- 26 ホテル = 大曾教会 = 鯛の浦教会(ミサ) = 有川 = 頭ヶ島教会・キリシタン墓地 = 有川港 ~ (高速船) ~ 佐世保 = 平戸(泊)
- 27 ホテル = 生月大橋 = 聖ガスパル様十字架の丘 = 平戸ザビエル記念聖堂(ミサ) 平戸市内 = 伊万里 = 唐津 = 福岡空港→仙台空港

Bコース(天草・雲仙の殉教地と外海巡礼3泊4日コース) 見積価格 ¥127,500

- 11/22 仙台空港→福岡空港 = 熊本 = 天草市内(泊)
- 23 ホテル = 天草切支丹館・殉教公園 = カトリック崎津教会 = カトリック大江教会・ロザリオ館 = 富岡城殉教地 = 鬼池港 ~ 口の津港 = 雲仙殉教地 = 雲仙市内(雲仙温泉泊)
- 24 ホテル(雲仙) = 長崎市内へ。ペト口岐部と187殉教者の列福式参加 = ホテル(長崎市内泊)
- 25 ホテル(長崎) = 外海地区巡礼(黒崎教会、出津教会、ド・口神父様記念館) = 西海橋 = 福岡空港→仙台空港

Cコース(長崎2泊3日コース) 見積価格 ¥93,800

- 11/23 仙台空港(午後出発)→福岡空港 = 福岡市内(泊)
- 24 ホテル = 長崎市内へ。ペト口岐部と187殉教者の列福式参加 = ホテル(長崎市内泊)
- 25 ホテル = 福岡空港→仙台空港

【→飛行機 = 貸し切りバス ~ 船舶 入場観光 下車観光】

* 日程は、交通機関、教会などの事情により変更になる場合があります。* 見積価格は、1室2名以上(航空運賃の値上げ・参加人数等により変更する場合がありますのでご了承ください。)* 各コースとも定員60名とし、30名ずつ2班に分けて行動する予定です。* 参加申し込みの受付時期は未定です。

日本カトリック司教協議会(会長:岡田武夫東京教区大司教)は、「ペト口岐部と187殉教者」の列福式を、2008年11月24日(月・振替休日)正午から、長崎市内の長崎県営球場「ビッグNスタジアム」(長崎市松山町2-5)に於いて挙行することを決定しました。

これを受けて、仙台教区として、参加される皆さんの便宜を図るため、列福式参加巡礼の旅3コースを設定し、多くの皆さんの参加を呼びかけることとしました。

A・Bコースには添乗員と司祭が同行する予定です。Cコースは、福岡空港から添乗員が同行する予定です。



教会の生け花について

Q: 教会でお花を生けるのを頼まれたのですが、色々なことをおっしゃる方がいて、どうしたらよいかわかりません。教えてください。

A: 毎週、お花を飾るといふ奉仕は、ほんとうに大変なことだと思います。ご苦勞様です。さて、典礼の規則の上では、感謝の祭儀の場に、お花を生けておかなければならないということはありませんが、お花がきれいに生けてあるのを見ると、ここでは、神様が大切にされると感じるものです。その意味で、生け花は大切なものです。

その意味でも、祭壇を覆い隠すほどの芸術作品としての生け花は、ふさわしくありませんし、逆に、まったくお花を飾らないというのも、ふさわしくありません。花や木などを適当に飾ることによって、主を賛美し、礼拝する私たちの心を表すことができるからです。

『ローマ・ミサ典礼書の総則』によれば、待降節中は、節度をもって花を飾り、主のご降誕の日よりも華やかにならないように、と勧められています。さらに、四旬節には、祝日、祭日、第4主日には、花を飾ることができませんが、その他の日に、お花を飾ることは禁じられていません。

最近では、典礼を表現する生け花の研究が行われているそうです。その日の福音なり、典礼のテーマにそって、花を飾るといふことができれば素晴らしいことだと思います。

祭日によっては、聖霊降臨の祭日には、炎の舌の形に似ている赤のグラジオラスを生けるとか、お告げの祝日には、百合を中心にするなどの工夫もなされています。

祭日には、炎の舌の形に似ている赤のグラジオラスを生けるとか、お告げの祝日には、百合を中心にするなどの工夫もなされています。

花を飾る場所については、祭壇の上は避けてください。祭壇の前や周囲にお花を飾ることはいいのですが、その場所が、祭儀の間に、司祭や聖体奉仕者、侍者の動きの妨げにならないように注意する必要があります。



青森明の星高等学校創立 70 周年



青森明の星高等学校「5人の聖人が来た」と報じられた1937年(昭和12年)に「青森技芸学院」としてスタートした。様々な試練と挑戦の中で青森、弘前、さいたま市に高等学校・中学校・短期大学・幼稚園など7つの教育事業体を持つ「明の星学園」として発展して参りました。青森明の星高等学校の70周年であると同時に学園の70周年でもあるのです。その歴史は創立3年前にカナダから5人のシスターが青森の地に派遣されたことから始まります。翌日の地元新聞には

「5人の聖人が来た」と報じられたそうです。シスターたちは教育的活動を通じてキリストのため、人々のために働くことを目的に設立された「聖母被昇天修道会」のミッシヨネル(宣教師)でした。5人のシスターたちは地域の様々な理解者と協力者を得て学校は着実に教育活動を広げていきました。そのような時、太平洋戦争勃発により、教育活動は制限され、外国人に対する迫害から本校は存亡の危機を迎えました。しかし、終戦を迎えたとき、幸い校舎は戦火をまぬがれ、日本人修道女が守り通した学園は再び帰った外国人シスターと共に新たな出発をします。そして今、70周年の歴史の区切りを迎えております。今年度、式典・祝賀会のほか、様々な行事を実施いたしました。6月15日にPTAの主催研修としてノートルダム清心学園理事長の渡辺和子先生による講演から始まり、さらに指揮者小松一彦氏と仙台フィルによる創立記念演奏会を催し、本校音楽科卒業生によるピアノコンチエルトは創立者の教育の大きな成果でもありました。11月9・10日に記念ミサ、式典が行

なわれ、式典には「感謝の祈り」を平賀徹夫司教に司式していただきました。この一連の行事の中で私たちはその歴史を振り返り、創立者の熱意と苦勞を理解しようとし、建学の精神を再発見します。その結果として自分たちのアイデンティティーをより明確にし、現在おかれている位置をより客観的に見るこ

とが出来たように思います。本校は来年度4月「青森明の星中学校」を再度開校します。70年間生徒・職員・シスターによって受け継いできた校訓「正・浄・和」の精神を6年間の中高一貫教育によって大きく育てたいと願っています。次の10年に向かう「明の星」の新たな夢への挑戦です。
(教頭・鈴木牧夫)

命あるもののほろびを喜ばれるわけでもない。生かすためにこそ神は万物をお創りになった(知恵の書1・13 14) 私たちはカトリック信者として洗礼を受けたとき死んだものなのです(ローマ6・3 10)。カトリック信者にとつて死について気軽に語り合えるのは死を乗り越えているからです。聖書が私たちに呼びかけていることを大切に現実を生きているものとなりましょう」と呼びかけた。

参加者からは、「平賀司教様はこの上ない優しい口調で私たちの心に直接語りかけてくださった。分かち合いの質問にも聖書の何章何節にこの



告知板

映画: マザー・テレサ メモリアル
マザー・テレサ没後10周年記念・ドキュメンタリー2部作
『母なることの由来』+ 『母なる人の言葉』
上映館: チネ・ラヴィータ(仙台駅東口) 022-299-5555
上映期間: 1月5日~2週間程度
配給: 「マザー・テレサ」上映委員会
協賛: 女子パウロ会 後援: カトリック
東京大司教区、カトリック中央協議会
カトリック新聞、カトリック仙台司教区



カトリック仙台司教区 病者・障がい者団体連合会は、病者の会「カソック」、視覚障がい者の会「アンジェラス」、健常者、障がい者の枠を超えて布教する会「福島グローリア」、病気・障がい・難民など弱い立場の人と共に歩む会「岩手病障協」の4団体で構成されている。
(岩手病障協 会長 小野寺哲)

ように書かれていると具体的に話され、聖書を熟知された説明に感銘させられた」など、喜びの声が聞かれた。

講演要旨

「あなたがたに新しい掟を与える。わたしがあなたたちを愛したように、互いに愛し合いなさい」

ロゴス研究所第7回講演会

講師 ドミニコ会管区長田中信明神父

昨年10月28日(日)、ドミニコ会管区長田中信明神父を東京からお招きし、右の題でキリストが教えられた「新しい掟」についてお話をいただいた。会場となった北仙台教会の信徒会館には、約80名が参加し、師の講演に熱心に聴き入った。

旧約に見る愛の掟

「愛と隣人愛」をもって、キリスト教の最も大事な「新しい掟」は、2つの掟ではなく、唯一の掟、「相互愛」だと問題があります。マタイ22・40(並行箇所：マルコ12・28、34、ルカ10・25、28)と申命6・4、9、レビ19・17、18も読み合わせてみましょう。第一に、二つの掟は、新旧約がそこにかかっているところと教えたのであって、二つの掟を、「新しい掟」とも、「わたしの掟」とも言っています。第二に、マタイ5・43、48の敵を愛しなさいも、新しい掟ではないということですが、これは「マタイ14・20、21、既に箴言25・21、箴言24・17など」の伝承です。第三に、ヨハネ13・34、35、15・12、17。「神へ

学者です。「いったいイエスは誰か?」と問うならばユダヤの伝承に挑戦する者です。神とは言わず、「わたしを信じよ」、「わたしに従え」、「わたしのために命を捨てよ」と言う人間、ユダヤ人にとつて、神の冒瀆者であり、石殺しに処せられるべき存在であったのです(レビ24・13、14)。以上のような状況の中で起きたイエスへの挑戦と



いうのは、冒瀆のことばを引き出すことであつたに違いありません。それを見抜いたイエスは、ユダヤ教徒である限り、否定し得ない、旧約にみる「2つの愛の掟」を取り上げたのです。さらに一歩進めて、隣人愛を神への愛と同一レベルまで高め教えを説きます。

キリストの愛の掟

ヨハネ13・14、15、34、35、1ヨハネ4・10、11で旧約の古い掟では、全身全霊、神を愛することを命じます。新約における愛は、神がまずわたしたちを愛してくださった事実をイエス・キリストのうちに見ます。両者で、神とわたしたちの愛の相互性が成立します。愛は一方的なものではありません。神がわたしたちを愛するだけでも、わたしたちが神を愛するだけでも、愛は完成しないことを示すのが「キリストの愛」に他なりません。キリストへの愛自体も、わたしたちとの相互性を本質とします。「すべてを捨ててわたしに従え」と命ずるイエス、わたしたちを愛し、命を捨てたイエスでもあります(ヨハネ3・16)。イエスと人間との愛の相互性が見られます。神と人間との縦の愛の相互性が、人間相互の愛と十字交叉するのが、キリストに見る愛の秘義に他ならないのです(1ヨハネ4・11)。

「自分自身のように」隣人を愛するというのが、「わたしがあなたたちを愛したように」互いに愛し合え、というのでは大きな相違があります。「相互愛」からする時、「敵であつても愛する」のではなく、「敵を敵でなく、友とする」のであればなりません。相手を「敵」とする「自我心」(利己心・自己中心)を超えていかなければなりません。「敵」と決めつけるのは「自我心」なのです。相手に対するわたしの理想・夢・期待なのです。キリストの教え「相互愛」の掟は、「わたしの掟」であり(ヨハネ15・12、17)、「わたしの掟」とは、キリスト自身のあり方の原型を意味します。

おわりに

わたくしがあなたたちを愛したように、互いに愛し合いなさい、これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。(ヨハネ15・12、13)

ごく平凡な「互いに愛し合うこと」の中に、単なる「隣人愛」(古い掟)を越えて「友のため」に命を捨てるほどの尊い愛「相互愛」(新しい掟)が潜在しているのです。それをキリストは自ら示されました。他者のための存在に成り切る「わたし」です。



宣教師の優先課題を確認

2007 仙台教区司祭の集い

仙台教区内で働く司祭33名が一堂に会して、教区のこれからの方針と優先課題について語りあい、交わりと一致を深めるための仙台教区「司祭の集い」を開催した。初日は、12月3日の午後から、「ラフォーレ蔵王」の会場で、司教講話「仙台教区宣教師牧基本方針と優先課題」が、「仙台教区宣教師



聖母被昇天修道会青森修道院

Sr. 横山まさ子
神様が修道生活

に招いてくださっている恵みを強く感じ、生涯をかけて、生きることを決心し、家族の反対を押し返して入会。初誓願後、幼稚園の仕事を通して奉獻生活を歩む中で、神様がお望みを果して行く事の喜び、苦しみ、悲しみなどのすべては神様の限りないからいであり、招きでもありました。

特に生涯養成コースの期間にフイリピンでの体験学習は忘れることが出来ません。あるスラムの集いに参加したときのこと、大勢の貧しい人々が聖書のみことばを聞き、自分たちのおかれた立場で熱心に分かち合う共同体の姿を見た私は、「貧しくさせられ

牧方針策定委員会
の答申」

を基になされた。その中で、教区に与えられている宣教と司牧の使命を改めて自覚しなければならぬことが強調された。さらに信仰教育、青少年活動・召命活動の強化と奉仕者養成などの取り組みべき優先課題を確認された。この講話を受けて、各グループに分かれて分かち合いを行い、その後全体会

招きをこたえて

16

た立場にある人々と共に生活することへの呼びかけが心に強く響きました。神様の招きを感じて、2年間祈り続けていました。そして長上から「エクアドル」への派遣をいただき、神様が「貧しい人々との生活」に招いてくださったと驚きつつも、喜びと不安を感じながらエクアドルに。中南米の、赤道を中心に北と南に別れて

でグループからの報告があった。また、司祭が教会観や宣教観についての共通理解を共有するための講習会を開催するべくことや共同体育成に重点を置くべきなどの提案もあった。夕食は懇親をかねた会食となり、余興も入り和やかな集いとなった。

翌日の4日には、司教座聖堂の小聖堂において司教主司式によって共同司式でミサをささげた。ミサ後、「日本カトリックに住む家族を定期的に訪問しながら、子供たちと仲良しになり、折り紙、ゲーム、神様のお話をする集いを重ねているうちに、この事が教会建設へと発展できたのは、まさに神様のほからいと、多くの方々の支えとお祈りのおかげでした。

無我夢中で、約10年を過ごしてきましたが、右足膝の関節炎のため日本へ帰国。手術、リハビリとの闘い。回復は困難。最悪の場合には車椅子、との診断でしたが、現在一本杖で歩けるまで回復した恵みに感謝し、「今こそ、その時あくまでも希望を持って生きよう」と与えられた場で、神様の限りないはからいに応えて行きたいと思っているこの頃です。



ック信徒宣教師会」の事務局長の漆原比呂志氏からこの会についてのアピールがなされ、理解と協力が呼び掛けられた。一泊二日の「司祭の集い」を終えた司祭は、各自それぞれの課題を携えて帰途についた。

(佐々木博)

岩手県「教区活性化研修会」教会とは

わたしたちは共に何ができるか

11月25日(日) 10時から、四ツ家教会において、約250人が参加して、「教区活性化のための研修会」が行なわれた。ミサに続く講話の中で、平賀司教は「活性化とは、一人ひとり皆が信仰を持って生き生きと生きられること。私の話は、こういうことをしたらという提案ではない。私たちはどういうものか、どういうものにしていただいているかを確認するところこそ喜びがあり、活性化がある」と前置きして、聖書、教会憲章、菊地司教の「21世紀を歩む教会」を参考にお話を進められた。原点を再確認するよう促されたお話は、ややもすれば「イベン」トで町の活性化を図る」と同じような考え方になりがちな私たちに対するやさしい諭しであるように思われた。

この日は、この後県の連絡協議会主催の研修会に移り、昨年に続いて「共同体として葬儀にどう関わるか」のテーマで田中神父の講話があり、司教様の講話を基調に今の自分たちの課題について考えた。これからの小教区での具体的な話し合い、活動を通してキリストを他の人々に現すことにつながることを期待される。(関谷秀雄)

司教日程

1・2月

- 1・8 司祭評・司祭団役員会
- 9 会津若松ザベリ才学園司教団社会問題研修会
- 10 司教団社会司教委員会
- 11 部落問題委 事務局会議
- 15 宣教師評議会 役員会
- 19 教区活性化研修会(八戸)
- 20 喜多方教会、幼稚園落成式
- 28 教区司祭団月例会
- 2 3 教区活性化研修会(青森)
- 5 司祭評議会役員会
- 7 神学院司教委員会
- 8 部干連 宗派代表者会議(大阪)
- 17 教区活性化研修会(倉吉)
- 18 22 臨時司教総会
- 25 県別司祭の集い
- 28 部落問題委 定例委員会



共同歩む教会

各地から

宮城県 豊屋丁教会

初代主任司祭のカリス

教会に寄贈される

昨年11月4日(日)、初代主任司祭モンタグ神父様のカリスとパテナが司教様を通して寄贈された写真。

わたしたちの教会は1916年(大正5年)弘前からモンタグ師を迎えて仙台で3番目につくられた教会であるが、カリスは師が1898年に叙階されたときに親戚の方々から記念として贈られたものである。青少年には特に人気のあったと聞く師が14年間の豊屋丁での司牧を終え、召還されてパリの小神学校長として帰国した際に故郷に持ち帰った。

この美しい細工がほどこされた見事なカリスの80年ぶりの来仙を喜び、主日のミサに使用されるたびに師の威徳を偲ぶとともに、教会の宝物として永く保存していきたい。

(佐藤英樹)

第30回聖霊による刷新

東北大会

「主イエス・キリスト あなたに会いに来ました」

子を探ねられたことがあったが、師の仙台での様子

記念すべき30回目という今大会は、大阪教区池田教会の畠基幸(はたもとゆき)神父様御受難会を5年ぶりに講師としてお迎えし、11月9日から11日までの3日間、仙台市の茂庭荘で開催された。畠神父様は、9月15日悲しみの聖母の日から12月23日まで、今年2度目



の中で、師は、過去40年の世界における聖霊刷新の流れについて、第2バチカン公会議の精神と刷新の本質に触れながら述べられ、師自らの聖霊体験を喜びのうちに証してください。また、教皇様がよく使われる「イエスの霊」をキーワードに、「永久の聖霊降臨」である聖体を中心に「キリストとの出会い」としての秘跡と、秘跡以外でのキリストとの出会い(苦しみを通して聖霊が下り、

最新で、寄せられた650名分(12月7日現在780名)の共同祈願を携えて大会に臨まれた。今大会では、「主イエス・キリスト あなたに会いに来ました」をテーマに、第23回「世界青年の日」教皇メッセージと昨年の聖霊降臨前晩の祈りでの教皇説教を参考資料として、3回に分けて講話がなされた。

新しく作り変えられるという新しいこと()について話してください。「救いとは新しく作り変えられるということ。私たちは、神の子として尊厳を持って、世界全体を自分のこととして受け止めてよう」という師の言葉を聞いて、参加者は、その思いを分かち合い、深めた。

小学生とはいえ、それぞれにスポーツクラブなどでできないか教会に来ることができないので、教会に来るときにはみんなの誇らしげな笑顔が印象的でした。小学生とはいえ、それぞれにスポーツクラブなどでできないか教会に来ることができないので、教会に来るときにはみんなの誇らしげな笑顔が印象的でした。



望みます。(稲葉 景)



閉会した。(原町教会 北澤浩美)

初聖体は教会の子供としての大きな第一歩。しかしこれらの歩みは決して光に満ちていないことばかりでないでしょう。クラブ活動や塾など子供たちの成長につれ、教会に来る機会はずっと続きます。家庭教会として、信仰教育の場として、今後より重要になっていくでしょう。教会と家庭が協力し合って、子供たちの信仰を大切に守ることができればよいと思います。子供たちの教会でのこの日の笑顔がずっと続くことを望みます。(稲葉 景)

活動紹介

盛岡地区の教会学校

四ツ家教会 池田伸吾

私が教会学校に関わって、2年になります。昨年、今年とサマーキャンプ、クリスマス会など、子供たちと一緒に折り、遊んで充実した時間を過ごしました。

キャンプ中のミサでは、折り紙に共同祈願を書いて鶴を折り、それを奉獻しました。昨年は戦争で苦しんでいる人々の

私の気分転換

遠野教会 菅田 美子

茜色の夕映えの中を数えきれない鳥の群れが埒(ねぐら)に帰っていく空を、全焼してボツと残った栗の老木の側に立つて見上げていた平成4年の夏。私は67歳、既に親も夫も帰天して犬の散歩から戻ると隣人の失火類焼が始まっていた。大切な我が家が真っ赤な炎に包まれ揺れ落ちる鮮烈な光景を、駆け付けて下さったエンデルレ神父様に腕を支えられて見詰めていた。当然沈黙に陥りながら...このとき私の胸の中を駆け巡った想いを今もはつきり覚えているが、これは神のご計画、もと

ために、今年は新潟の地震で被害を受けた人々のために折り鶴を作り祈りました。子供たちも苦しんでいる人たちの気持ちをよく理解した祈りを書いていました。

そのほかの活動としては、日曜日の教会学校があります。私たち担当者と神父様が事前にテーマを話し合い、勉強する内容を決めます。子供たちにわかりやすく話すためには、自分たちも勉強しなければならず、自

もと命も物(家)も神様から頂いたもの、主あたえ給い、今、主之を取り給う...と。幸せをなくした灰色の心の中にその時どこから「重荷を負うものは我に來たれ」という聖句が力強く響いてくるではないか。思わず「主よ助けてください!!」と魂の底から祈ったら、急に気分が楽になり、昔、友と歌った「帰れソレントへ」がバックグラウンド・ミュージックのように聞こえ、不思議な気分転換でパニックにならずに神への新しい一歩を踏み出すことが出来、15年。お蔭様、お世話様、有難うの心境です。



四ツ家・志家・上堂教会合同キャンプ

分の信仰を見つめ直し確かめることが出来ます。

子供たちの人数が少なくなってきたこと、また教会に來なくなっていることが、今後の課題です。魅力ある教会、教会学校にするために、力を合わせていきたいと思えます。

訃報

スール マリア アントニナ 酒井 君子 o. p.



2007年11月14日 聖ドミニコ修道女会 北仙台修道院にて帰天

修道誓願後、69年 享年90

長年、児童養護施設「仙台天使園」に於いて、母親の愛をも



つて子供たちを養育し、晩年には北仙台教会の香部屋係りとして、献身的に奉仕の日々を送った。

スール マリア アヌンシアタ 中島 智子 o. s. u.



聖ウルスラ修道会一本杉修道院のスール マリア アヌンシアタ中島 智子は2007年11月23日 東北大学緩和ケア病棟にて 帰天。享年75

1960年8月31日 初誓願 1963年8月31日 終生誓願

聖ウルスラ学院にて小学校・中等学校・家庭学校等で宗教と社会科学の教師として教鞭をとっていた。また、聖霊刷新の祈りにも熱心に参加していた。

お二人のために、永遠の安息をお祈りください。



新刊案内

『ヨハネによって イエスの福音を読みとる』

著者 澤田和夫/発行 女子パウロ会/定価 1400円+税

福音書にはマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの4書がありますが、各福音書記者はそれぞれが「ゼビイエスについて、これだけは伝えておきたい」と思つ言葉を書き残しています。

本書は、その中でも特に、自らをイエスに「愛された弟子」「愛する弟子」と自負していた使徒ヨハネが書き記した福音書を著者が深く黙想し、著者が神から照らされたみこばを取り上げて、読者にやさしく分かち合つてくださったものです。

ヨハネ福音書を、著者は各章から1つのテーマを取り上げ、その章で、イエスが私たちに伝えたいと思われたことはこれだ、と言つ言葉で各章のタイトルを付けています。

さらに、1章、6章を「新しい時代の告知」、7章、12章を「重大な拒否」、13章、最後の21章を「イエスの時」と3部に分け、私たち読者にイエスの生涯を把握しやすく配慮しています。著者は、毎年仙台に、黙想指導にいらつしやるので、「存じの方も多いと思いますが、東京教区司祭で、高円寺教会の協力司祭として司牧に携わる一方、黙想会での霊的指導司祭としても著書が司祭です。師の黙想書は、多くの方の心にイエスの心を伝えることでしょう。